

町史のひとこま (第十九回)

須恵の眼科医 ②

——南蛮流眼科の系譜か？

高場流眼科という呼び名

前回、江戸時代の記録に、須恵の眼科医田原家と高場(岡)家とは、いずれも高場順世という人の医術を受けついでいると書かれていることをみました。

では、高場順世の伝えた医術はどの流儀に属するのでしょうか。高場順世は自ら一つの流儀を創始していたようです。この意味で、須恵の眼科医は「高場流眼科」という流派に属していると考えられます。

今、明治三十七年刊行の小川劍三郎著『日本眼科学史』を開いてみましょう。「近世史 眼科諸流」の項に「高田流 筑前国末邑高田七兵衛ヨリ伝。田原流ハコレヨリ出ツ」とあります。前回書いたことですが、高場順世は、もと高場進士兵衛と名のる武士ですから、この本の「末

邑高田七兵衛」は「須恵村高場進士兵衛」の誤まりで、したがって「高田流」は「高場流」と訂正されるべきだということになります。なお、同書には高場順世の名は「高場順清」として出ています。

江戸時代の医学は中国から伝えられた漢方が主で、幕末には外科などの蘭方も盛んになりました。このほか、朝廷に伝わった日本古来の医学や、戦国時代から江戸時代初期にかけては南蛮流医学も伝えられました。蘭方が長崎商館のオランダ人医師(時には国籍をいつわったドイツ人医師もいた)によって伝え

キリシタンの医術

キリシタンの医術は中国から伝えられた漢方が主で、幕末には外科などの蘭方も盛んになりました。このほか、朝廷に伝わった日本古来の医学や、戦国時代から江戸時代初期にかけては南蛮流医学も伝えられました。蘭方が長崎商館のオランダ人医師(時には国籍をいつわったドイツ人医師もいた)によって伝え

られたのに対し、それよりはるかに早い時期の南蛮流医学は、スペイン・ポルトガル系のキリスト教宣教師らが、西洋医学を



旧 田原眼科屋敷跡 (点線は石垣の部分)

持ち込んだものです。

私は、須恵の眼科はキリシタン系の南蛮流医学ではないかと見ています。眼科史の面では、蘭学医前の南蛮流眼科はわが国の医学にたいした影響をおよぼさなかったとされていますが、ひそかに須恵に伝えられ、キリシタン禁制後も繁栄を誇ったのではなかったでしょうか。

高場順世の墓

もう一度、須恵の眼科の始祖高場順世にもどってみます。順世の墓は町内にあり、次のように刻まれています。

(表) 高場順世先生墓
(裏) 貞亨三年十一月五日
寺沢志摩守臣

俗称進士兵衛

貞亨三年は一六八六年で、臣とは家臣・家来の意味です。

寺沢志摩守広高は肥前唐津八万石の城主で、肥後天草に四万石を合わせてもっていました。その子兵庫守堅高の時島原・天草にキリシタンたちの反乱が起き、その責任を問われて堅高は自殺、寺沢家は二代で断絶しました。この広高・堅高親子もはじめキリシタン大名で、その所領天草は大友宗麟が支配し、のち

に小西行長の領地となるなど、著名なキリシタン大名が治めていたところで、キリシタン文化が最も栄えた地の一つでした。このように考えてくると、広高の家臣高場進士兵衛が、天草にいてキリシタン文化に接し、宣教師の伝えた南蛮流眼科の技術をもって須恵に移ってきた、こう考えても間違いではないようです。

詳しくは高場流の眼科書が専門家によって検討されるべきですが、たとえば田原眼科や岡眼科では、江戸時代に簡単な外科療法をおこなったらしいのも、西洋医学の流れをくんでいたこと

の証明ではないでしょうか。高場順世は「真人」(仙人)と呼ばれ、その技術は「妙伎・神術・秘訣」と称されたのを見ても、高場流眼科の内容が当時の漢方医学の水準をはるかに超えていたらしいことがうかがわれます。

こうした高度な医療技術があったためでしょうか、田原眼科は日本四大眼科の一としての名声を得ることもありました。(町誌編集委員会事務局・石龍)



旧 高場(岡)眼科の長屋門